

# 相声「統一病」再論

——「中宣部評語」を中心にした考察——

弓 削 俊 洋

## 1. 受難の元凶「中宣部評語」

「統一病」（1956年作）は、毛沢東の指示で遂行された「社会主義的改造」を痛烈に諷刺し、それ故に反党・反社会主義の「毒草」とされて、文革後の1981年に初めて公開されるまで二十年以上も封印された相声<sup>1)</sup>である。

また、作者何遲<sup>2)</sup>も、「統一病」の創作を重大な「罪状」として公職追放・労働改造の処分を受け、強制労働と拷問により半身不随となるなど、反右派闘争から文革終結までを苛酷な迫害のなかで過ごした。

このような受難に作品と作者を導いたのが、中国共産党中央宣伝部の「評語（原文：批語）」である。中国共産党中央宣伝部（以下、中宣部）は、党のイデオロギー、方針、政策の宣伝・教育を担い、新聞、出版、教育、テレビ、ラジオに及ぶ広範な部門を管理・監督する機関である<sup>3)</sup>。したがって雑誌編集や作品評価に対しても大きな影響力を行使し、「統一病」への「評語」もその一つの具体例である。

実は、「統一病」は1957年2月刊行の雑誌『曲芸』創刊号に掲載される予定であった。しかし何遲は、共産党員である自分が党中央の最重点政策を諷刺するような作品を発表してよいか逡巡し、原稿を中宣部に送付して判断を仰いだ。その結果、「非常に悪い作品」で「敵が宣伝する材料となる」と断定され、作品と作者の悲劇的運命を招くのである。

後に何遲は自伝<sup>4)</sup>で、中宣部への審査申請を「自ら罫に落ちる」行為だと自嘲しつつ、この中宣部の評語こそが自分を「二十年にわたってきつく締め付け」「右派」のレッテルを貼られ、半身不随」へと追い込んだ元凶だと憤る。

その上で、中宣部の二人の幹部を「×××同志」「××同志」と表記して<sup>5)</sup>、「評語」を書いた「×××同志」に対しては、自分の受難が彼のもたらした「幸福」だと皮肉る一方で、その「×××同志」が問題処理の指示を請うた「××同志」については、文革後に繰り返した自己批判と謝罪によって「わだかまり」も消えたと述べている。

さらに、中宣部の評語は、『曲芸』編集部が掲載を決定したことも問題にし、文芸界の「思想的混乱」の象徴として批判している。こうした批判に対する『曲芸』編集部の「回答」は、同誌副主編・陶鈍が「統一病」と何遲を指弾する文章を反右派闘争中に発表することであった。

このように相声「統一病」は数奇な運命を辿りながら、1950年代から80年代に至る時代の転変と、文芸家や文芸官僚たちの生き様を映し出す「鏡」としての役割も果たすのである。

本稿は、作品の内容、創作から封印までの経緯を踏まえた上で、「中宣部評語」が与えた影響、中宣部幹部「×××同志」「××同志」の正体、「××同志」の自己批判と謝罪の実態などを考察しながら、以前の拙論<sup>6)</sup>の補足・修正も含めた再検討を行い、「統一病」という作品を通して、人民共和国建国後の中国文芸界とそこで生きた人々の人生と心情の一端を明らかにしようというものである。

## 2. 相声「統一病」

### ① 「社会主義的改造」への疑問

相声「統一病」は1956年の中国を描いた作品である。ルポルタージュ作家・劉賓雁はこの1956年という年を回想して次のように述べている。「この年はたしかに生気がみなぎっていた。中国共産党は自信に満ちていた。新年早々、私

営商工業に対する社会主義的改造が意外なほど順調にすすみ、資本家のいかなる抵抗にもほとんどぶつからなかったからである。1956年は、中国にとってであれ、わたし個人にとってであれ、きわめて重要な年であった。巨大な希望をはらんでいた年であった」<sup>7)</sup>。

周知のように劉賓雁は、社会主義体制下の暗黒面を剔抉する作品を1956年に発表し、翌年の反右派闘争では「右派」として断罪された作家である<sup>8)</sup>。その彼ですら1956年を「巨大な希望をはらんでいた年」と回想し、その理由を、「社会主義的改造が意外なほど順調にすすんだ」からだと説明しているのである。

「社会主義的改造」とは、1952年末に毛沢東が提起し、1954年に党が正式に採択した政策であり、農業、商工業、手工業において、生産手段の私的所有を廃止し公営化に転換させることを目的にしていた<sup>9)</sup>。1956年はこの政策が「基本的に達成された」年であり、劉賓雁によれば、「その年の初めから全国の都市は熱気に沸き返り、ドラや太鼓を打ち鳴らして街頭を練り歩き、資本主義商工業の社会主義的改造の完了を祝賀した。(中略)わたしは、当時、資本主義が中国で平和裡に消滅したことを一大壮挙であると考えたし、はては『資本主義は中国で消滅した』という本を書きたいとさえ考えた」という(注7参照)。

しかし何運は、改造政策の進展に対して大きな違和感をもち、それを「太早了(早すぎる)」という言葉で表している<sup>10)</sup>。というのも改造は当初、「十年から十五年あるいはさらに多くの時間をかけて」遂行するとあったのに、その後大幅に期間が短縮され、わずか三年あまりで「基本的完了を宣言された」からである。

また、改造の結果に対しても大いなる疑問を抱いていた。たとえば食堂は、公営化後、営業時間が「統一」されたうえに、味やサービスの低下、名物料理の消滅という状態に陥り、茶葉販売店は、統一仕入れ、統一製造によって味も「統一」されるなど、国民の生活は「太不方便了(まったく不便になった)」からである。

社会主義的改造は、「個性」や「積極性」をなくす方向へ社会全体を「統一」

する政策だというのが何遲の認識であり、拙速な改造がもたらす歪みを告発した作品が「統一病」なのである。

## ② 相声「統一病」

相声「統一病」は重症の「統一病」患者の男を主人公にしている。男の「病歴」は幼少期に始まるが、成人後はさらに「統一学」の研究に励んだため、「病状」はいっそう悪化する。その最初の被害者が家族であり、服装、家具、日用品の全てを男の好きな青で統一されたうえに、起床から就寝にいたる生活時間もすべて統一され、男の鳴らすベルの音に合わせて行なわれるのである。

そんな男が百万都市の市長になったことにより、被害者は一気に膨れ上がる。かれは最初に市内の地名から人名までをすべて記号や番号に統一し、そのため手紙の宛名も「甲区、9号町、35組、3462戸、34658号人」と書くこととなった。

さらに市民の行動も統一され、市役所内の放送室から送られる合図に合わせて行動するよう義務づけられた。その徹底ぶりは、軍隊さえも及ばないほどであった。

しかしそれでもまだ男は満足できない。というのも人間の顔と体の統一が残っているからだ。この難事業を達成するために彼は特別プロジェクトチームを作り、「統一薬」を開発させ、市民の顔形を統一することにした。

某月某日の午前零時、市長の号令に合わせて全市民が一斉に「統一薬」を飲み、八時間後には「統一人間」が誕生する。ところが、親兄弟や夫婦の間でさえも互いが判別できなくなり、全市は大混乱に陥った。

そこで今度は「統一解除薬」を開発して市民に飲ませるものの、ただ一人市長だけが元に戻ることができなかった。市民に服用させる際に、自ら模範を示すため、二倍の量の「統一薬」を飲んでいたのである。

一見、荒唐無稽な話のようだが、前述の改造政策と関連させて読むと、ブラックユーモアと寓意に富んだ作品であることが分かる。ドタバタ劇の中に潜

ませた何遲のメッセージは、極度に画一化された社会の恐怖と、それをもたらす性急な改造への警鐘であった。このメッセージは党中央が推進する国策への異議申し立てに他ならず、究極的には「最高権力者」毛沢東への批判という危険性も孕んでいた。それ故に何遲は「統一病」の公開を逡巡し、中宣部での審査を申請する<sup>11)</sup>のだが、その結果「自ら罅に落ち」て苛酷な運命へと導かれていくのである。

### 3. 「自ら罅に落ちる」－「統一病」完成から反右派闘争へ－

#### ① 「統一病」完成後の経緯と何遲の心情

「統一病」の原稿完成後の経緯について、何遲は自伝の一部「自ら罅に落ちる」<sup>12)</sup>で詳細な証言を残している。本稿での考察の核心部分になる資料なので、長文の引用となるが関係部分を以下に掲げる。

私はその晩「統一病」という相声を書き終えると直ちに『曲芸』編集部へ郵送した。編集部からはすぐ手紙がきて、この相声を肯定し、しかも発表する予定とのことだった（この手紙は今なお私の手元にある）。しかし私は何度も考えた。大多数の人の政治的観点と異なる作品を、共産党員が発表していいだろうか、と。作品が発表されたら、単に個人的な認識の問題に留まらず、きわめて大きな影響を与えることになるかも知れない。そこで私は『曲芸』編集部へ手紙を出し、「統一病」の返却を求めた。編集部からはすぐさま返事がきて、相声「統一病」はすでに編集部内でも検討され、『曲芸』創刊号に発表することを決定している、とのことであった。

慎重を期すため私は、『曲芸』編集部から返却された「統一病」を、（1957年）1月29日、中宣部に送付し、手紙も同封した。私は考えた。もしもこの作品の観点が時宜に適していないのなら、指導者が指摘し、訂正してくれるだろう、と。しかし私はあまりにも幼稚すぎた。私は党の規律を遵守し、悪影響をもたらすことがないように、自ら指導部への審査を申請したのだが、結

果的には私は自分で自分を「売った」のだ。これによって私はなんと「極悪非道」の「右派」、「修正主義分子」、「反党集団の頭目」に変わってしまったのである。……私のように愚かにも「自ら罠に落ちる」ような人間は他にいないかも知れない。

作品と手紙を送った後、それらは（中宣部）幹部の×××同志の手に落ちた。かれは読んだ後、評語を書いたが、この評語こそが私を二十年にわたってきつく締め付けたのである。かれの判決文は以下の通りだ。「××同志：万障繰り合わせのうえ、必ずこの相声をお読みください。私は、社会主義的改造と都市政策とを中傷した、非常に悪い作品だと思えます。もしこれが発表されたならば、私たちが個性を消滅させ人民を束縛していると、敵が宣伝する格好の材料になるでしょう。現在の社会に対して、作者がなぜこのように反感を抱くのか、私には理解できません。しかも『曲芸』編集部は、この作品が正確な立場に立っているとみなし、発表するつもりだそうです。ここから文芸界の一部の同志たちの思想的混乱を見いだすこともできます。いかに処理すべきか指示を請います。」

私はこの幹部の評語は全く道理がないと思う。

第一に、社会主義を憎悪し、反党、反社会主義の目的で『統一病』を書いたのならば、何故いち早く雑誌『曲芸』に発表してその目的を遂げようとしなかったのか？ 第二に、党への忠誠心がないなら、中宣部に作品の原稿を送って判断を仰ぐはずがないではないか？ 第三に、文芸作品、特に相声は誇張や荒唐無稽な表現を用いる。この作品が正しくないというだけで、作者に反党、反社会主義のレッテルを貼るのは性急すぎる。

（中略）私が「右派」のレッテルを貼られ、半身不随となり十八年間病床に臥すようになるのも、すべて×××同志がもたらした「幸福」なのである。党の十一期三中全会後、××同志は会議の席上で度々自己批判をし、文芸界の多くの人たちの理解を勝ち取った。××同志は人を通じて、私への敬意を表してくれた。これは小さなこととはいえ、私の心を温かくし、××同志に対するわだかまりを解いたのである。

このように何遲は原稿完成後の経緯と心情をつぶさに記しているが、その要点を整理すると以下の五点となる。

- ① 原稿を先ず雑誌『曲芸』に送付し、同誌編集部は創刊号への掲載を内定した。
- ② (1957年) 1月29日に中宣部へ転送した原稿に対して、「×××同志」が「非常に悪い作品」と決めつける評語を付して、「××同志」に問題処理の指示を仰いだ。
- ③ 同評語では、作品掲載を決めた『曲芸』編集部の判断も問題とされた。
- ④ 「×××」同志による非難は「全く道理がない」ものだが、何遲の悲運の元凶となった。
- ⑤ 「××同志」は、文革後に自己批判を繰り返し、何遲にも「敬意を表してくれた」ので、かれへの「わだかまり」は解けた。

以上を踏まえて次に、「統一病」掲載決定を批判された『曲芸』編集部のその後の対応、反右派闘争から文革における何遲の受難、「×××」「××」という二人の中宣部幹部の「正体」を考察して、「中宣部評語」の果たした役割について検証していきたい。

## ② 『曲芸』編集者による何遲批判

何遲も言うように、中宣部の評語は「統一病」と何遲の運命に決定的な影響を及ぼした。審査申請から四ヶ月後の1957年6月には反右派闘争が始まり、8月には早くも党中央機関誌『人民日報』に何遲批判の文章が掲載され<sup>13)</sup>、12月には『曲芸』副主編・陶鈍も何遲を罵る「何遲是要笑誰？」<sup>14)</sup>を『文芸報』に発表し、ともに「統一病」を「反党反社会主義」の作品として指弾するからだ。作品自体は公開されないまま、「統一病」の創作を重大な罪状として作者が糾弾されるという状況が出現したのである。

前掲自伝によれば、『曲芸』編集部は、「統一病」に対して肯定的評価をし、創刊号への掲載も決めていた。しかし結局、1957年2月28日発行の『曲芸』創刊号<sup>15)</sup>には「統一病」は掲載されなかったし、12月には以前の評価を反転さ

せ、作品を全否定する文章が公にされるのである。それが副主編・陶鈍<sup>16)</sup>の「何遲是要笑誰？」である。同文章で陶鈍は、「統一病」中の「番号制」「統一薬」などの場面を引用しつつ、苛烈な作品批判、何遲攻撃を行っており、以下はその結論部分である。

われわれの都市は社会主義的改造を経て、非常に短期間のうちに社会主義の都市になり、社会主義制度を打ち立てた。私営商工業に対する社会主義的改造は、都市の様相を一新し、皆は大いに喜んだ。歴史上前例のないような大変革のなか、いたるところでドラの音が天まで響き、爆竹が鳴り、人々は熱狂的に社会主義を迎え入れたのだ。しかし、党内の異分子何遲は、この大変革に対して敵視する態度を取り、相声によってデマをとばして侮蔑し、いかなるところにも存在しないし、永遠にあり得ないことを描き出した。社会主義改造が全てをだめにした、というのである。

(中略) 何かおかしいというのだ？ 恐らく何遲だけが笑っているだろう。いや、帝国主義者や台湾国民党が聞けばきっと喜ぶだろう。(中略) 何遲が追求している「笑いの芸術」は、帝国主義、台湾国民党が必要とするものである。(中略) いま何遲に告げよう。おまえはすでに悪の深淵に陥り、ブルジョアの代弁者、人民共和国に潜入した帝国主義と台湾国民党の特殊宣伝員になったのだ。

おまえは、無制限な誇張と根拠のない推断とこじつけ、「満天」のデマという創作方法で、相声や映画の台本を気ままに書くことができた。しかし今、おまえはすでに市場を失った。おまえの反動思想、腐れ切った名利的観点は、すでに壁にぶち当たった。人民はこの毒草がこれ以上伸びるのを決して許さない。

既述のごとく中宣部の評語は「統一病」を「社会主義的改造を中傷した非常に悪い作品」であり「敵が宣伝する格好の材料」だと断罪した上で、『曲芸』編集部の掲載決定を文芸界の「思想的混乱」の表れだと批判した。陶鈍論文の



指弾は、改造政策への誹謗、利敵行為だという点で評語の論点と完全に一致している。そういう点で、「中宣部評語」は、反右派闘争での「統一病」批判の論理的枠組みを作ったと言え、それは何遲を苛酷な境遇<sup>17)</sup>へと追い込んでいく。

陶鈍論文の発表と軌を一にするかのように、何遲の居住地天津では攻撃が激化していった。1957年末の集会では「統一病」が槍玉に挙げられ、作者へのつるし上げが行われた。以後、何遲は「唾棄すべき反革命分子、大右派と軽蔑され白眼視される」状況へ追い込まれ、「入水自殺への誘惑」にかられながら不安と絶望の日々を過ごす。

迫害は夫人の佟素麗にも及んだ。職務停止処分となったうえ、夫と「明確な一線を画す」ため離婚を迫られたからである。さらに母親は、将来を絶たれた息子一家の負担になるのを恐れて絶食し、服薬も治療も拒否した結果、「妻子のために生き続けなさい」という言葉を遺して他界した。実質的な自死である。

家族も巻き込んだ悲劇の連鎖が続く中、1958年5月4日、何遲への処分が決定する。その内容は、党籍剥奪、党内外の一切の公職解任、行政上は監督労働処分、経済上は給与差止め（毎月30元的生活費は支給）という厳しいものであり、処分通告の翌日には労働改造所に送られ、一日16時間に及ぶ労働、食物は6個の「窩頭」<sup>18)</sup>だけという生活が始まる。その結果、体重は16キロも減り何遲の心身をすり減らしていった。

1960年代の初めに一時仕事に復帰できたものの、まもなく文革が始まり、元「右派」として再び迫害を受けるようになる。こめかみへの36発の殴打、足の下に煉瓦を置いてその足を踏みつける「万力」拷問や、劣悪な環境下での強制労働などが原因して、1969年には難病を発症して半身不随の身となり、以後死ぬまで寝たきり生活を余儀なくされる。

しかしそれでもなお悲劇は終焉を迎えなかった。文革終結後の1981年に「名誉回復」されるものの、その通知を受ける数日前、今度は医療ミスにより右手の自由までも失ったからだ。元「右派分子」を軽んじた医療関係者たちのずさ

んな「治療」が原因だった。

このように何運は反右派闘争から二十年以上にわたって辛酸をなめることになり、「中宣部評語」は正にその元凶として彼の運命を変えたのである。

#### 4. 「×××同志」と「××同志」

##### ① 「××同志」

それではこの「中宣部評語」にはどのような人たちが関わったのだろうか。特に、評語の執筆者「×××同志」と、問題処理の指示を請われた「××同志」とはいったい誰なのか？ 現時点で明確に言えるのは、「××同志」が周揚だということである<sup>19)</sup>。

周揚（1908～1989年）は、1930年代から左翼文芸界の指導者として活動、人民共和国建国後は文連副主席、作協副主席・党団書記、文化部副部長、中宣部副部長などの要職を歴任し、各思想キャンペーンの度に指導的論文の発表や報告を行うなど、建国から文革までの十七年間、「実質上は文化・思想部門の政治的最高責任者の地位」にあった人物である<sup>20)</sup>。

中宣部との関わりで言えば、1954年に文芸処と科学処を統括する副部長に就任して、1957年当時も中宣部における文芸関係の最高責任者であった。中宣部において「統一病」処理の指示を請われる立場にいたわけであり、これが「××同志」を周揚とする第一の理由である。

第二の理由は、文革後の言動にある。文革において周揚は一転して攻撃を受ける側になり、「建国以来、文学・芸術界を支配して来た反党修正主義路線」の代表として1966年失脚、以後九年に及ぶ投獄生活も経験する。この文革体験は周揚の思想と言動を大きく変容させた。この点について周揚追悼文はこう述べる。「党の十一期三中全会<sup>21)</sup>以後、彼は、歴史の経験を総括する中で厳しく自分を律し、1930年代からの工作上的誤りに対してしばしば自己批判を行った。また彼は、自分の仕事によって不適切な批判や処遇を受けた同志に対して、誠実に謝罪した。彼のこうした精神と気概は人々から尊敬を得た<sup>22)</sup>」。

この追悼文は、前掲の何遲自伝における「党の十一期三中全会の後、××同志は会議の席上で度々自己批判をし、文芸界の多くの人たちの理解を勝ち取った」という記述と符合している。

では周揚の自己批判や謝罪は具体的にはどのようなものであったのか。1977年12月30日、周揚は文革後初めて文芸界の会議に公式参加して自己批判を行った。「私は老兵です。錯誤と欠点が多く、その中には路線上の誤りも一般的な誤りもあり、歴史的な誤りも現在の誤りもあります。自分の誤りに対する批判を私は全て受け入れます。これは私にとって非常に良い教育ですので、感謝しなければなりません」<sup>23)</sup>。

翌78年後半、広州での文学工作会議では、元「右派」30人余りを前にして涙ながらの謝罪も行っている。「私はみなさんに申し訳なく思い、今日みなさんに謝りたい。もちろん、あなたたちが数十年間にわたって受けた辛苦や苦難は、私の謝罪で償うことはできません。しかし、ここにおられる方々を間違っ

て右派とした責任から逃れられないと私は認めなければなりません」<sup>24)</sup>。こうした自己批判と謝罪の集大成が、第四文代会（中国文芸工作者協会第四次代表大会）での報告である。同大会は1979年10月30日から11月30日まで開催され、大会準備指導小組組長として開催準備を統括した周揚は、11月1日、「継往開来繁栄社会主義新時期的文芸」<sup>25)</sup>と題する報告を行い、建国後の批判運動について総括する。「われわれ文芸の指導を担ってきた者たちは、当時の歴史的条件や背景、また自身の“左”の思想が適切に克服できなかったために、文芸戦線における階級闘争を正確かつ現実的に判断できず、文芸と政治の関係も正確に処理できなかった。そのため階級闘争を拡大し、人民内部の矛盾と敵対的な矛盾という二つの矛盾を混同し、思想や文芸への批判を行う際に政治運動と大衆闘争の方法を用いてしまった。こうした不適切な方法によって精神世界の問題に対処して、一部の同志を傷つけてしまったのである。

特に、1957年の文芸界の反右派闘争においては、二つの矛盾を混同する状況が深刻化し、多くの同志に対してあってはならぬ攻撃を行うとともに、正確あるいは基本的には正確な文芸観や文芸作品にも誤った批判を行ってしまった。

こうして才能も業績もあり、勇敢に真理を探求する大量の芸術家を傷つけてしまい、“百花斉放、百家争鳴”の提出後に現れた、文芸界における生氣あふれる状況を頓挫させたのである」。

これらの周揚の言動は多くの作家たちの共感を呼び、反右派闘争の被害者だった王蒙<sup>26)</sup>も、周揚の自己批判や謝罪が誠実で沈痛極まるものであり、その反省を踏まえて創作の自由など勇敢な主張を展開したと述べ、「周揚は大人物」だと賞賛するのである<sup>27)</sup>。

さらに王蒙編集の『憶周揚』（注23参照）には、晩年の周揚を礼賛する回想文が数多く収録されている。その中の一編<sup>28)</sup>には、党中央の反右派闘争評価が確定する前に謝罪したことを非難する人々に対して、「反右派は党中央が指導したものだが、自分も指導者としての責任を負っており、党中央や毛主席だけに責任を負わせることはできない」と反駁したことを紹介し、「自らの意思で誠実に謝罪し、勇敢に自己分析を行い、敢えて責任を負う精神は、多くの老文芸家たちを感動させた」と記されている。

以上のように、文革での被害者体験を通じて、周揚の思想と言説は大きく転換した。1977年9月の名誉回復以後、文芸界の指導者としての復活を果たしていく過程で周揚は、過去の自分の言動に対する自己批判と謝罪を繰り返し、多くの文芸関係者たちの「理解」や「尊敬」を勝ち取っていったのである。

1957年当時に文芸を管轄する中宣部副部長だったこと、文革後に自己批判と謝罪を繰り返したこと、さらに姓名が二文字であるという点からみて、周揚以外で「××同志」に該当する人物は見当たらない。

## ② 「××同志」

では、評語の執筆者「××同志」、何遲が「右派のレッテルを貼られ、半身不随となり病床に伏すようになる」原因を作った人物はいったい誰なのか？断言はできないものの、一つの可能性として挙げておきたいのが、林黙涵である。

林黙涵（1913～2008年）は、中宣部文芸処処長、中宣部副部長、文化部副部

長を歴任した、建国後文芸界における政治的指導者の一人であり、中宣部では1950年代初期から仕事を始め、1952年に文芸処副処長（処長は丁玲）、1954年に文芸処処長、1959年には中宣部副部長（文化部副部長も兼任）に昇進している<sup>29)</sup>。

「統一病」の審査を行った1957年には、文芸関係の管理・監督の実務を担う中宣部文芸処の処長であり、この文芸処を管轄する副部長が周揚であった。つまり林黙涵は周揚直属の部下であり、こうした二人の関係から、「統一病」への対応に関して周揚に「指示を請う」たのが林黙涵である可能性は高い。これが「×××同志」が林黙涵であると推測する第一の理由である。

第二の理由は、文革後の言動にある。林黙涵も文革で一時失脚したが、文革終結後に文連副主席、文連党組書記などに就任し、文芸指導者としての復活を果たす。しかしかれは復活後も一貫して「左派（保守派）」の立場を堅持し続け、第四文代会の報告の内容を巡っても周揚と激しく対立した<sup>30)</sup>。

二人の対立の焦点は、建国十七年の文芸界への指導に対する評価と、文革後に勃興した「傷痕文学」<sup>31)</sup>への評価であった。周揚は建国後の指導において「左」の路線を執行したと自己批判し、「傷痕文学」については肯定するという立場をとったが、林黙涵はそれに頑強に反対した。自分たちの指導は基本的に正しかったし、「傷痕文学」のような社会の暗黒面を描く文学は否定すべきだと主張したのである。

実は周揚報告の草案はもともと林黙涵が作成したものである。だが周揚はその内容に納得せず修正を求め、林も二度修正したのだが、周揚はなお不満であり、結局当時の中宣部部長胡耀邦の指示により周揚が起草することとなった。しかし二人の対立はむしろ激化し、これ以後も批判と修正の応酬が続くなか、大会の開催がずるずると延期されたのである。

こうした経緯は二人の対立がいかに深刻だったのかを物語っているが、その根底には「改革開放」政策や創作自由の主張に対する林黙涵の不信感や敵愾心が存在していた。

1988年、林黙涵は雑誌『中流』を創刊する。この雑誌は前身の『時代的報

告』の創刊宣言にみられる「革命を継続し修正主義を批判する」という編集方針を継承し、1983年の「精神汚染キャンペーン」を発動した保守派元老の王震からは「マルクスレーニン主義と毛沢東思想を堅持し、社会主義と愛国主義の旗を高く掲げて資産階級の自由化に反対した」と賛美されている<sup>32)</sup>。

さらに1989年には『『河殤』 宣揚了什麼?』<sup>33)</sup> という論文を『人民日報』に発表して、『河殤』攻撃を行った。『河殤』は1988年に中央電視台で放映されたドキュメンタリー番組で、中華文明の歴史を批判的に検証し、それが近代化の障害となっていることを明らかにした話題作である<sup>34)</sup>。この番組に対して林黙涵は、「中国人民に対する極めて大きな侮辱」「中国史における祖国統一の一切の努力に対して懐疑、嘲笑の態度をとった」「中華人民共和国の誕生が世界の力関係を改変し、わが国の搾取制度を消滅させたこと、社会主義建設の偉大な成果を否定し、社会主義は“ユートピア” 幻想だと攻撃した」など口を極めて非難したのである。

このような林黙涵の言動には、文芸界の「左派」指導者としての自負心と、社会主義建設への奉仕こそが文芸の使命だとする信念が強く漲っている。それは逆に創作自由や暗黒暴露への激しい敵愾心を示しており、反右派闘争時における「右派」弾劾を彷彿とさせる。特に『河殤』批判の論調は、中宣部評語における「統一病」批判と通底するものである。

以上のように、中宣部が「統一病」の審査を行った1957年に中宣部文芸処の処長だったということ、文革後もなお「統一病」批判と通じる暗黒暴露敵視の立場を取っていること、姓名が三文字であることから、「×××同志」が林黙涵であると推測するのである。

こうした林黙涵の言動はよく知られた事実であり、何遲も知っていた可能性は否定できない。だとすれば、文革後も文芸界に大きな影響力を保持している林黙涵への名指しでの批判は控えたものの、自分の受難が「×××同志」のもたらした「幸福」だという記述は、「悔い改めない」指導者に対する精一杯の皮肉だったと言えるのである。

## 5. 「××同志」と丁玲

悔い改めない指導者と悔い改めた指導者、二人に対する何遲の評価はまったく対照的である。しかし実は「××同志」、つまり周揚に対しては別の評価もある。

確かに、林黙涵に比べると、文革後の周揚は過去の自分と誠実に向き合い、嘗て自分が禁圧してきた創作自由を擁護したと言える。だが、辛酸をなめ尽くした被害者たちの心情は複雑であり、周揚に懐疑の目を注ぐ文芸家たちもいた。また、周揚の自己批判や謝罪自体にも不十分さや問題があった。その象徴が丁玲への対応である。

丁玲（1904～1986年）は、1920年代末から数多くの話題作を発表し、建国後は文芸界の指導者の一人として、中宣部文芸处处长、作協副主席、中央文学研究所所長、『文芸報』主編、『人民文学』主編などを務めた女性作家である。しかし、1955年から彼女に対する批判が始まり、反右派闘争では「反党分子」「右派分子」として断罪され、1979年に公職復帰するまでを迫害の中で過ごした<sup>35)</sup>。

丁玲批判の主要な論点は二つある。一つが1933年に国民党特務に逮捕され南京に監禁されたときの問題であり、それは共産党を裏切り「転向」したという政治的疑惑、さらに「叛徒」馮達と同居し彼の子を出産したという道義的批判よりなる。もうひとつが南京脱出後、共産党の根拠地・延安で、党幹部の特権化や女性差別などを描く雑文や小説を執筆し、これらの作品や、後にトロツキー派として処刑された王実味の「野百合花」などを、自分が文芸欄主編である『解放日報』に掲載したという問題である。

この丁玲問題を検討する作協の会議を主催したのが作協党団書記と中宣部副部長を兼務する周揚であり、会議の席上で彼は、南京時代の転向問題を持ち出して「歴史的汚点」だとして断罪したのである。こうして丁玲は周揚の「左」路線の犠牲者となったのだが、彼女に対する周揚の態度は文革後も冷淡、冷酷なものであった。

丁玲三番目の夫であり、彼女の死を看取った陳明は、文革後の周揚と丁玲との関係について以下のような証言<sup>36)</sup>をしている。丁玲への批判と迫害には周揚は重大な責任を負っており、過去の誤りを自己批判し謝罪するなら、最大の被害者の一人である丁玲にもすべきだ。しかし、1979年6月9日、入院中の周揚を見舞いに行った丁玲に対して、気遣いや謝罪の言葉を一切発せず、自分が文革中に受けた暴力、妻への迫害を語るのみであった。その後周揚と面会した丁玲の娘の祖慧に対しても、「丁玲には汚点が残っている」と発言した。さらに丁玲の完全な名誉回復を妨害しようと、問題の再審査を進める中宣部副部長・賀敬之に対して「文芸界で仕事を続けたいのか?」「叛徒の哲学に賛同するのか?」などと恫喝すらしたのである（以上は陳明証言の概要）。

周揚との「再会」については丁玲自身も言及している。「彼は自分や妻の受難を非常に感慨深げに語った。これらは当然とても悲しむべき事であるが、文芸界のほとんど全ての人間が同じような苦難を経験しているし、だれでも知っていることである。私も聞いて同情はしたが、同様のことを余りにも多く見聞したし、自分自身も体験したので、あってはならぬことだが、些か麻痺状態になっていた。だが、私は見舞いに行ったので、じっと我慢して聞き終え（いやもしかすると終わらなかったかも知れぬ）、別れを告げて帰ってきたのである」<sup>37)</sup>。

抑制した表現の中にも、自分への迫害のみを語る周揚への反発を込めた文章である。この丁玲以外にも、「左」路線の犠牲となった胡風に対しても周揚は極めて冷淡な対応をしており<sup>38)</sup>、文革後の周揚の歩みは決して一本道ではなかった。こうした事実を踏まえ、公的な場での度重なる謝罪も、結局は人々の同情を買い、自分を「殉教者」に仕立てる演技にすぎないとの見方すら存在するのである<sup>39)</sup>。そこまで打算的であったかは別にしても、少なくとも周揚の言動には批判されても仕方ない側面があったことは間違いない。

以上の事実を見たとき、周揚への「わだかまりを解いた」という何遲の言葉は本当なのかという疑念も生まれるのだが、もはや彼の真意を確かめる術はない（何遲は1991年逝去）。いま言えるのは、自伝の中で何遲が、創作の意図や



経緯を詳細に証言すると共に、敢えて作品の全文を掲載したという事実であり、そこには、「統一病」という相声作品への強い思い入れと、その作品を20年以上も封印し、自らを謂れなき迫害に導いた「中宣部評語」への激しい怒りが吐露されていることである。

## 注釈

- 1) 相声「統一病」は、『天津演唱』1981年1期において初めて公開された。なお、「相声」とは一人で演じる「単口相声（日本の落語、漫談）」、二人で演じる「対口相声（漫才）」、三人以上で演じる「群口相声」に分けられるが、本稿で扱う相声は「対口相声」を指す。
- 2) 何遲（1920～1991年）は演芸作家、劇作家。日中戦争時代に抗日運動に参加し、1942年に共産党入党、人民共和国建国後は、主に天津で活動し、天津市戯劇曲芸協会主席、天津市戯曲学校校長などを歴任した。1950年代に相声「買猴児」「開会迷」などの話題作を発表するが、「反右派闘争」で批判され、文革でも激しい迫害を受けた。1979年に「名誉回復」されて創作活動を再開し、中国曲芸家協会常務理事に選出された。主要作品は『何遲文集①②』（百花文芸出版社 1998年4月）に収録されている。
- 3) 中国共産党中央宣伝部については『岩波 現代中国事典』（岩波書店 1999年5月）、『中央宣伝部を討伐せよ』（焦国標著／坂井臣之助訳 草思社 2004年8月）等による。なお、1957年当時の部長は陸定一。
- 4) 『何遲自伝』（何遲口述、胡孟祥主編、玉東顔・陳建平・何長記録整理 東方説唱芸術系列叢書 中国民間文芸出版社 1989年11月）「自投羅網」。
- 5) 「××」「×××」と匿名表記にしたのは、何遲自身の判断なのか、編集者あるいは出版社の処理なのかは不詳。
- 6) 拙稿「封印された漫才—相声「統一病」と作者何遲の受難」（『愛媛大学法文学部論集 文学科編』27号 1994年2月）。なお、このほか何遲関係の拙稿として、「相声「買猴児」の世界」（『啞啞』21・22合併号 1985年12月）、「相声「開会迷」と雑誌『人民文学』（『野草』38号 1986年9月）がある。
- 7) 『劉賓雁自伝』（鈴木博訳 みすず書房 1991年8月25日）。
- 8) 劉賓雁（1925～2005年）。ルポルタージュ作家。社会主義中国の暗黒面を描いた「本報内部消息」（1956年）、「在橋梁工地上」（同）によって、反右派闘争で「右派」として批判される。文革後に名誉回復されるが、1987年「ブルジョア自由化」批判の中で共産党を除

名され、1988年出国、以後帰国の機会を失ったままアメリカで客死した。

- 9) 「社会主義的改造」については注3『岩波 現代中国事典』による。
- 10) 注4『何遲自伝』「背道而馳（附相声「統一病」）。
- 11) 何遲が「統一病」を中宣部に送付したのには、最大のヒット作「買猴児」に対して「国家、幹部、人民に対して完全な悪意に基づく嘲笑を行った許しがたい作品」だという非難が浴びせられたこと、暗黒暴露の作品を完全否定する陳其通らの論文「我們対目前文艺工作的幾点意見」が1957年1月7日付『人民日報』に掲載されたこと等が影響している。「買猴児」批判や陳論文の詳細については注6拙稿3編を参照されたい。
- 12) 注4『何遲自伝』「自投羅網」。
- 13) 「何遲勾結呂班、鐘恬斐企図独霸曲芸界」（『人民日報』1957年8月24日）。
- 14) 陶鈍「何遲是要笑誰？」（『文芸報』1957年35号 1957年12月8日）。
- 15) 『曲芸』創刊号（1957年2月28日発行 主編：趙樹理、副主編：陶鈍）。
- 16) 陶鈍（1901～1996年）は曲芸作家・研究者。1958年に中国曲芸工作者協会副主席、1979年に中国文連副主席、中国曲芸家協会主席に就任。なお自伝的回憶集『一個知識分子的自述』（山東人民出版社1987年6月）では文革中に受けた自分への迫害に言及するが、「統一病」に関する記述は見られない。
- 17) 何遲の受難については注4『何遲自伝』の「跌入深淵～“摘帽”“度荒”」、古立高著「懷念喜劇作家何遲」（『新文学史料』1994年1期 1994年2月24日）による。
- 18) トウモロコシやコウリヤンなどの粉を水でこねて円錐形に丸め、蒸して食べる食品で、かつては粗末な料理の代表であった（小学館『中日辞典 第二版』より）。
- 19) 注6拙稿では、「中宣部評語」の執筆者を周揚としていたが、再検討の結果、指示を仰がれたのが周揚であり、評語の執筆者の可能性としては林黙涵だと訂正する。なお1990年代より「統一病」を再評価する論考が発表され、「中宣部評語」にも言及するが、人物の特定は行っていない。注17「懷念喜劇作家何遲」、阿May「相声是小人物話語權—由何遲与新相声想到的」（『曲芸』2009年8月号）、胡孟祥著「談何遲」（『曲芸』2010年1月号）、戸張東夫『中国のお笑い 伝統話芸“相声”の魅力』（大修館書店 2012年12月）。
- 20) 周揚の経歴については、『中国現代文学事典』（東京堂 1985年）「周揚」、羅銀勝著『周揚伝』（文化芸術出版社 2009年5月）、黎之著『文壇風雲録』（河南人民出版社 1998年12月）、「談周揚—張光年、李輝對話録」（『新文学史料』1996年2期 1996年5月22日）等による。
- 21) 中国共産党第11期中央委員会第3回全体会議（三中全会 1978年12月18日～12月22日）では、「改革開放政策」が採用され、経済改革、対外開放、思想解放が提唱・推進されることになった。

- 22) 「周揚同志生平」(『文芸報』1989年第36期 9月9日)。
- 23) 劉錫誠「回憶周揚二三事」。王蒙・袁鷹主編『憶周揚』(內蒙古出版社 1998年4月)所収。
- 24) 藩荻「一条真生的漢子」(同上書所収)。
- 25) 「繼往開來繁榮社會主義新時期的文芸—1979年11月1日在中國文學藝術工作者第四次代表大會上的報告」(『人民日報』1979年11月20日 『文芸報』1979年第11期)。
- 26) 王蒙(1934年～)は、『人民文學』1956年9月号に短編「組織部新來的青年人」を発表し、党幹部の思想的変節、無気力と官僚主義が蔓延る党組織を描き、反右派闘争で「反党反社會主義のブルジョア右派分子」として批判され労働改造の処分を受けた。文革後、作協副主席・党団書記、『人民文學』主編、文化部長などを歴任。
- 27) 王蒙「周揚—目光如電」(注23『憶周揚』所収)。
- 28) 藩荻「一条真生的漢子」(同上)。
- 29) 林黙涵の経歴については、李輝「与林黙涵谈周扬」(『北京文學』1998年7期)、徐慶全『文壇撥乱反正実録』(江蘇人民出版社 2004年4月)、注3『岩波現代中国事典』、「林黙涵」<http://zh.wikipedia.org/wiki/%E6%9E%97%E9%BB%98%E6%B6%B5> 等による。
- 30) 周揚報告作成の経緯については注20『周揚伝』、徐慶全「周揚四次文代会主題報告起草過程述実」(『新文學史料』2004年2期)による。
- 31) 蘆新華「傷痕」(1978年)、劉心武「班主任」(1977年)など、文革終結後、被害者の立場で文革の惨害を書いた文学作品をいう。注20『中国現代文學事典』「傷痕文學」。
- 32) 王震給林黙涵、魏巍的信「认真办好『中流』」(<http://blog.renren.com/share/249253861/1819166857>)。
- 33) 「『河殤』宣揚了什么？」(筆名：易家言 『人民日報』1989年7月19日)。  
引用は、環球視野編輯部「紀念林黙涵同志」(2008年1月15日 <http://www.globalview.cn/ReadNews.asp?NewsID=13653>)による。
- 34) 『河殤』(中國中央電視台1988年6月放映)。関係資料として、蘇曉康・王魯湘『河殤』(現代出版社, 1988年6月)、辻康吾等訳『河殤—中華文明の悲壯な衰退と困難な再建』(弘文堂 1989年3月)、蘇曉康編／鶴間和福訳『黄河文明への挽歌「河殤」と「河殤」論』(学生社 1990年2月)等がある。
- 35) 丁玲の経歴、周揚との関係については、注20『中国現代文學事典』、丁玲著・田畑佐知子訳『丁玲自伝』(東方書店 2004年10月)「解説」、丸山昇『文化大革命に到る道』(岩波書店 2001年1月)、李向東・王增加著『丁陳反党集團冤案始末』(湖北人民出版社 2006年1月)等による。
- 36) 査振科・李向東整理「陳明口述：丁玲晚年那些事」(『新文學史料』2010年4期)。

- 37) 丁玲「我読『洗礼』」(『当代』1982年3期 1982年6月20日)。
- 38) 胡風と周揚の関係については、梅志著『胡風伝』(北京十月文芸出版社 1998年1月)、李輝著『胡風集団冤案始末』(湖北人民出版社 2003年1月)等による。
- 39) 何満子「偶感三則」(『文学自由談』2005年第1期)、注20『周揚伝』。